
ジュディハピ!

田中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジュディハピ！

【Nコード】

N6758X

【作者名】

田中

【あらすじ】

イケメン達を乙女ゲー感覚で攻略していく逆ハー女を傍観する物語。主人公は逆ハー女ではなく脇役。『終わらない高校二年生』のループに気付いたことで物語への介入を強制されてしまう。偶に立つ巻き込まれフラグを全力でへし折っているつもりだけど成功したり失敗したり。ループを終わらせるためにコソコソ頑張る話。

設定 ・ 登場人物

正式タイトル + 意味

J u d y H a p p i n e s s ! G a m e C o u n t ?

???

(ジュディ ハピネス！ ～ゲームカウント　??？　～ 略して『ジュディハピ！』)

J u d y - それは甘い夢のような恋の世界に生きた女神の名前。

H a p p i n e s s - それは恋を求めた女神が輝く甘美な夢の舞台。

G a m e C o u n t ? ? ? - それは恋に溺れた女神が巡った世界のカウント数。

概要

思考が残念な愛の女神が仕掛けた魔法を発動させた少女の逆ハーイ物語を傍観する物語。

主人公は逆ハーイ女ではなくクラスメイトFくらいの超脇役。『いつまでも終わらない高校二年生』のループに気付いたことがキツカケで物語への介入を強制されてしまう。

イケメン達を乙女ゲー感覚で攻略していく逆ハーイ女を傍観しているけど、偶に立つ巻き込まれフラグを全力でへし折るのが主人公の日常。

しかしフラグは何時でも何処でも容赦なく立ち続けるので、何やかんやで色々巻き込まれたり巻き込まれなかったり。

舞台

逆ハー女が発動させてしまった魔法により、1年間がループする事になってしまった学園が舞台。

学園の名前は『四季ヶ丘学園』。私立の金持ち学校なので通う生徒は基本的にブルジョワ。

生徒会、風紀委員会なる二つの組織が存在し、その地位と権力は教師をも凌ぐ。学園生徒の憧れの的。

逆ハー女用便利システム

・手持ちの携帯電話により攻略対象者の簡易プロフィールをチェックする事が可能。

・手持ちの携帯電話により攻略対象者の好感度をチェックする事が可能。

・手持ちの携帯電話により攻略対象者の現在地をチェックする事が可能。

・手持ちの携帯電話により攻略対象者の攻略情報をチェックする事が可能。

・手持ちの携帯電話から危機的状況回避のため警告メールが通知される。

プロフィール、情報の引き継ぎは可能だが好感度を引き継いでのプレイスタートは不可。

クリア条件

・逆ハー女が飽きたら終了。

対象者全員を攻略してもプレイヤーが飽きない限り物語は終わりを迎えない。

・????

逆ハー女云々は関係なく、物語が終わりを迎える条件を満たせ

ば強制終了させることが可能。

主人公たち

・主人公 平田加奈子ひらたかなし（高二）
ループに気付いた事で物語への介入を強制されてしまった不幸な脇役主人公。

平凡な容姿で存在感が若干薄め。逆ハーフやイケメンに興味がないのでループが終わる事を切に願っている。

わりと裕福な家庭に生まれているが学園内では庶民寄りに分類される。

趣味や特技はこれといったモノがなく、ぼんやりして一日を過ごすことがよくある。

・逆ハーフ 姫川愛華ひめかわあいか（高二）

愛の女神の魔法を発動させた、通称『逆ハーフ』。二年の四月下旬に転校してくる。

魔法の補正により超絶美少女化しただけでなく頭脳明晰、運動神経抜群というチートになった。

既に複数のループを経験したためイケメンにチャホヤされるのが当たり前だと思っている。

とりあえず逆ハーフレムエンドを迎えるまでは飽きる予定がない。補正により学園理事の血縁者という設定になっている。趣味や特技は色仕掛け等々。

攻略対象者

生徒会

・一宮蓮（高三）
いちのみやれん

生徒会会長。黒髪に紅目をした美形。性格は横暴で自分が一番でないと気が済まない俺様。

世界的に有名な財閥の跡取りらしい。腹違いの弟と妹が一人ずついる。

・二宮玲（高三）
にのみやあきり

生徒会副会長。金髪碧眼の美青年。物腰柔らかい王子様に見えるて中身は腹黒。日英ハーフ。

ジュエリー業界では名を知らぬほど有名な企業の次男。

・三宮穂高（高二）
みつみやほたか

生徒会会計。ふわふわウェーブの茶髪に茶目のイケメン。見ため通り性格もチャラク女関係がだらしない。

大製薬会社の末っ子。姉が四人いて長女が既に跡を継いでいる。

・五宮伊織、伊吹（高一）
いつみやいおり いぶき

生徒会書記と庶務。伊織が書記で伊吹が庶務。

茶髪緑目のイケメン双子。見た目がそっくりで親でも見分けがつかない。悪戯好きで愉快犯。

和洋菓子会社の子息。どちらが跡取りかは決まっていない。

・六井湊
むついはやせ

生徒会顧問。明るい茶髪に黒目の美形。どこからどう見てもホスト。担当教科は数学。

風紀委員会

・七瀬正臣（高三）
ななせまさおみ

風紀委員会委員長。焦茶の髪と瞳に銀のフレーム眼鏡。デレの

見えないツンデレ。むしろツンツンツン。デレは出張中らしい。

・八瀬楓 やつせかえで (高二)

風紀委員会副委員長。ハニ ブラウンの長髪と瞳。女顔の美少年だけど性格は漢。『可愛い』は禁句なのでウツカリ言つとフルボッコ。

・九瀬弦 くせゆずる (高一)

風紀委員会所属。赤茶髪に琥珀の鋭い眼。どこからどう見ても不良。口より先に手が出るタイプだが口も悪い。

・十倉誠二 とくぐちまこと

風紀委員会顧問。オールバックの眼鏡教師で規則に厳しい。担当教科は歴史公民。

その他

・四宮???

一定の条件をクリアすると登場する隠しキャラ。

欠番四のため、生徒会の関係者であることが想定されるが逆八ノ女が未攻略のため詳細不明。

・???

一定の条件をクリアすると登場する隠しキャラ。逆八ノ女が未攻略のため詳細不明。

・???

一定の条件をクリアすると登場する隠しキャラ。逆八ノ女が未攻略のため詳細不明。

その他の登場人物

・浅野絵理あさのえり（高二）

主人公の友人。

・小椋詩織おぐらしおし（高二）

主人公のクラスの学級委員長。三つ編み眼鏡の真面目キャラ。
逆ハー女の世話役にされてしまう。

豆知識

・生徒会、風紀にてある程度の地位を持つには『数持ち』でなければならぬ。

『数持ち』とは文字通り名に数の入る家柄出身を指す。

プロローグ

それは現代と呼ばれる世界より遙か昔の話。
神や天の使者が世界の中心だった時代に、多くの者に愛されたいと願った美しい女神が居た。

女神の名は『ジュデイ』。

美しい容姿と優しい心で万人に惜しみなく愛を与える役目を持つ愛の女神。

ジュデイは愛の女神の名の通り、愛を与えるべき人々を慈しみながら日々を過ごしていた。

ある者が涙すればジュデイは慈しみの言葉をかけ、ある者が嘆けば己での愛でその者の全てを包んだ。

そんな風に美しく優しい愛の女神を人々だけでなく、天界の神々も誇りに思い真の愛の女神だと信じていた。

だがある時、ジュデイは美しい自分に向けられる恋慕という名の愛に気付いた。

愛を与えるという職務を繰り返す内に、最初は与えられた愛に喜んでいた者が何か別の感情をもって自分を見ていることに、ふと気付いたのだ。

ジュデイの容姿と心に虜になった者は多く、ジュデイは次第に己が他の誰よりも美しいのだと日々思うようになった。

ジュデイが微笑めば相手の頬に朱が差し、ジュデイが囁けば相手の心を高鳴らせた。

それを確信したジュデイは、どんな愛をどんな者に送ればよいかを考えていた思考を消し去り、どんな仕草をすれば好意を持たれるのか、どんな言葉をかければ相手の心に響くのかを考えるようになった。

った。

与えていたはずの愛が恋慕という最高の形で還されていることにジユデイは狂喜し、愛す立場から愛される立場に在ると思いついた。

そしてジユデイはいつしか、それを利用して虜にした眉目秀麗な者だけを侍らせ甘美な空間で暮らし始めた。

万人に注ぐ愛をその者達だけに与え、万人に向けるべき愛を惜しんで神の職務を怠けた。

そうやってジユデイの世界は望むままに美しく輝き、望むままの時を刻んだ。

そんな風に愛する世界で美しい者達に囲まれたジユデイは、その世界を閉じ込めて『永遠の箱庭』を作ろうという考えに行き着いた。愛する世界に愛する者達を閉じ込め己を永遠に愛すだけの小さいけれど大きな欲に溺れ切った、ジユデイにとっては愛に溢れた美しい世界を。他者にとっては欲に溺れた醜い世界を。

しかし、やはりジユデイの行動は多くの神と天の使者の怒りを買った。

神々は欲に溺れたジユデイから虜にした美しい者達を解放し、神の資格を剥奪した。

だがそれに納得できなかったジユデイは己への愛を還せと憤怒し、女神だった頃の面影を消し去って醜く傲慢な姿を天界に晒した。

神々はそんなジユデイを哀れに思い、涙した。

その容姿に見合った清く美しい心で愛を囁き、惜しみなく注ぐ女神の姿が何処にもないことに失望した。

神は神を殺せない。

創造すべき神から死を生み出せないという天界の法則に従い、神々は何重もの鍵をかけた小箱にジユデイと醜い欲を封じることを選択した。

赦さない…！ 私の愛する世界を消してしまうなんて、絶対に赦さない！！

小箱に封じられる最後の最後で放ったジユデイの言葉は、蓋を閉じる神々には聞こえなかった。

光ある世界から真つ暗な小箱の底に封じられる寸前に絞り出すようにかけたジユデイの魔法を、堕ちた愛の女神に顔を背けた神々は気付くことができなかった。

そして時は流れ、退屈な日常に刺激を求めた一人の少女、姫川愛華が偶然にも女神の小箱を手に入れたことで愛と欲にまみれた物語が始まりを告げる。

デジャヴ

「今日から高校二年生だね！」

その事実気付いたのは、校門で会った同級生の一言だった。

高校二年生の春休みが終わり、ついに受験や就職を控えた最終学年への初日だと思って登校した私

平田加奈子

へ告げられた、

何気ない一言。

普段の私なら適当に相槌を打って妙なボケを聞き流すはずだが、それはできなかった。

なぜなら、私はこのやり取りに覚えがあるからだ。更に言えば感覚的には丁度一年前のはずがフラッシュバックしてくる記憶の数は約十回。

サーっと全身から血の気が引き、混乱する頭で必死に考えた。浮かんでくる複数回の記憶は数分の時間の違いや仕草が違う等の誤差があっても、すべて同じ結果を導き出していく。

…… 私は『高校二年生の初日』を知っている。

デジャヴと呼ぶべき私の状態に気付いた様子のない彼女は軽い足取りで先に門を過ぎていくが、その逆で私の足は行き交う人の邪魔になりながらノロノロと進んだ。

この先に張り出されている新しいクラス発表を見に行く彼女の背にも見覚えがあり、私は淡々と記憶の中で自分や彼女の何組を知っていた。

そう、私は今日に限らず『高校二年生の一年間』を知っているのだ。

やったね、私達二人とも二年二組だよ！

笑顔で駆け寄ってくる彼女が、後に彼氏となるクラスメイトと肩をぶつけ合ってしまう、ほんの先の未来。正確には過去。私の中にだけ残る記憶。

「やったね、私達二人とも二年二組だよ！ また同じクラスで

……きやあ！」

「うわっ、ごめ、大丈夫か!？」

ほら、記憶に残る映像の通り。

ペコペコと互いに頭を下げている二人を眺めて、微かに震えた手を強く握りしめた。この場で別れても教室で再び顔を合わせる二人の反応さえ、鮮明に浮かんでくる。

「冗談だろう、と笑い飛ばしたくなった。

鮮明に残る記憶は私が見た夢に違いないと思いこみたくなった。

けれども、互いに好印象で手を振って別れる二人を見ていると記憶が間違いでないことを証明されているようで、途端に泣き出したくなった。

ああ、誰かが私のおかれている状況を否定してくれないだろうか。澄み渡る青空を大袈裟に仰ぎながら、この時の私は自分が繰り返される日常の中に居るといって、脳裏に浮かんだ非現実的な状況を必死で否定していたのだった。

だって、それはまるで絵空事のようにだから。

(繰り返される生活に、なぜ私だけが気付いてしまったのだろうか)

身に覚えのある感覚を味わいながら、私は何度目かになる二年初日の教室に居た。

すっかり見慣れてしまっている光景にも関わらず、周りは新鮮だと言わんばかりの空気を溢れさせている。

チャイムと同時に教室に入って来た担任を見て、女子が嬉しそう
な声を上げるのも知っていた。

学園で一、二を争うほど人気のある教師、六井湍^{むついはやせ}先生がブランド
もののスーツに身を包んで登場したからだ。

湍と書いてハヤセと読む珍しい名前を本人は気に入っていると専
らの噂だけど、特定の人にしか呼ぶ事を許さないと聞いたことがあ
る。

誰にどんな基準で許容しているのかは分からないけど、顧問をし
ている生徒会の役員と風紀委員が先生の名前を呼んでいるのは確認
済み。けれどそれ以外は知らない。正直に言ってしまうえば、先生の
名前なんてどうでも良かったからだ。

それでも繰り返し返した記憶の中では、数多くの女子生徒や女教師が
六井先生の名前を呼ぼうと意気込んでいた姿があった。

そして、誰もがことごとく却下されて先生の機嫌を著しく損ねて
いた結果になっていたはず。

……その中で、たった一つの例外があるとすれば。

「おい平田。二年の初日から随分な態度だな」

「っ……！」

「まさか俺の話を聞いていなかった、なんて言わねえよなあ？」

記憶を辿ることに集中していた私の前には六井先生の姿があった。真新しい出席簿を持って自分の肩を叩いている先生は、初日から問題児を見つけて面倒だと語るような目をしていた。

これはマズイと焦った私は慌てて立ちあがり、先生と交差した視線を俯くことで下に移した。

それでもぐるぐると回る頭の中で考えるのは『以前』の情景。確か、ここで先生の話の話を聞かずに注意されるのは男子生徒だったのに何故か私にすり替わっている。

考える事に必死で、傍目からはぼんやりしているように見えた私にターゲットが移ったということは、恐らく私が『以前』と何か別の行動することで多少の変化が生じてしまうのだろう。

「話を聞いていたなら、何を言ったのか答えてみる」

「あの、き、『今日は講堂での集会だけなので早く移動するように』と、えっと、『生徒会と風紀委員の発表があるが騒ぐんじゃねーぞ』と、『生徒会顧問である俺への拍手は盛大に』です」

「……なんだ聞いてるじゃねーか。具合でも悪いのか？」

「よ、よくボンヤリしてると言われるので」「なるほどな。だが変な誤解されねーように今後は気を付けるように」

何度も耳にした先生の言葉を思い出しながら答えた私を、先生は手にしていた出席簿でパコッと頭を軽く叩かれた。

これ以上私に用はないとばかりに教卓へ戻っていく先生の背を眺めながら、小さく息を吐く。

知っているようで、微妙な変化のあるこれから先の未来を思うと憂鬱で仕方なかった。

何故私が、何故私だけが、お願いだから悪い夢であって欲しい。と願っても、誰も答えてはくれない上に現実だから夢も覚めない。

(もし私がこれから先の未来いちねんを知っているというなら……)

私が気付いた一年目は様子見に徹底する、と静かに自分の中で結論を出した。

この一年で何が起こるのか情報を収集し、再び巡るかもしれない一年に備えると決めた。もしかしたら次の一年は巡らないかもしれない。

「じゃあこれでHRは終わりだ。委員長」

「き、起立っ、礼！」

いつの間にか、見た目だけで先生に指名された委員長の号令に従いながら頭を下げる。

意外に冷静な自分に驚いてしまっけれど、微かに震える手足を見てやはり落ち着かないのだと改めて思った。

(だって、心の中の私は『夢なら早く覚めて』と何度も叫んでいたから)

報告します

結論から言ってしまうと『高校二年生の一年間』は再びやってきた。

ループしている一年間はほぼ私の記憶通りで、情報を集めるためにある程度の行動を起こしても大差はなかった。

何か利点を上げるなら、繰り返す事で高校二年生の授業では困らなくなつた事だろうか。テスト範囲も出題される問題も同じなので律儀に勉強した私の知識が必然的に深まっただけ。

けれど私は自分に訪れる変化が怖くて試験では適当に間違えて中の上あたりの成績をキープしている。大差ないと言っても、やはり知らない一年は怖かつたから。

ループしている事実混乱しなかったのか、って？

そんなの、繰り返される高校二年の初日に自宅へ帰ってから泣き喚いだ事で『泣いてもどうにもならない』と悟れたよ。

……まあ、今は私の話はどうでも良いので置いておこうかな。

情報収集に徹底すると決めてからの一年で、ひとつ確実だと断言できる事がある。

わたしが巻き込まれている『高校二年生の一年間』の主演 姫川愛華 のことだ。四月末という中途半端な時期に私と同じクラスに転入してくる美少女で、学園の人気者達から次々とアプローチをかけられお姫様のような扱いを受ける子。

彼女、姫川さんは良く言えば天真爛漫で、悪く言えば宇宙人だった。

姫川さんと学園についてまとめたノートがあるから、ちょっとページを捲ってみよう。

ここから先に綴られている物語は、私が実際に見て来た一年間だから信じられなくても目を背けないで欲しい、な。

(書いた本人である私は背けたくて仕方がないけれど)

(……そう言えば。)

(繰り返される一年が再びやって来ても、このノートが消えなかったのは何故だろう?)

日記（四月）

ノートの一ページ目は滲んだ文字で始まっていた。

『とりあえず落ち着くために日記を書くことにした』と。それからの数日は記憶と変わらない日常に怯える言葉が綴られており、必ず文末には『帰りたい』とあった。

一体何に帰りたいのか。冷めた気持ちでパラパラとページを捲る今の私には当時の私の弱々しい心を理解できない。

そしてついに、物語の主人公が現れたことを綴るページに差しかった。

四月の日記

四月 日（はれ）

今日は朝から学園中が騒がしかった。

原因は四月の下旬と言う中途半端な時期に転校生がやって来たからだ。

転校生は私と同じ二年二組。名前は姫川愛華さん。容姿端麗で本当にお姫様みたいな人だ。

担任の六井先生もすぐく気に入っているみたい。だって自分の名前を姫川さんに呼ばせていたから。

嫌そうに騒ぐ女子を無視して教室内でイチヤイチャし出した二人に私は思った。

そういうことはホテルでやれ、と。その後、姫川さんは学校に不慣れということとで学級委員長の隣の席になっていた。

姫川さんの容姿に騒ぐ周りの男子や睨む女子に先生は『俺の愛華

に手を出すんじゃないぞ』と言っていた。

どうした先生。まさか遅い春がやってきたのか。そして真っ赤になって怒ってる姫川さん、見た目はマジ天使だけど何かわからんが超ウザイ。

ああ、何だか今日という日を境に学園が騒がしくなる気がする。早く帰りたいなあ。

四月×日（はれ）

今日も朝から学園中が騒がしかった。

原因は昨日転校してきた姫川さん。噂によると姫川さんは生徒会副会長の二宮玲先輩（にのみやあきほ）と仲が良かったらしい。

転校してきた姫川さんを理事長室まで案内したのが副会長だとか。何でも、姫川さんは理事長の親戚らしい。職権乱用かよ理事長。

しかし、私にはどうでもいいことだけど副会長ファンの女子は気に入らなかつたようだ。

姫川さんが登校するなり、数人で姫川さんを囲んで文句を言っていた。何これイジメ？

と思っていたら学級委員長が『転校したてで学園のルールを知らないだけだから、ね？』と言って一生懸命姫川さんを庇っていた。

わあ委員長つて大変だよな。変な風に飛び火しなけりゃいいけど。その後、『わたしと玲先輩は友達だもん！』と言った姫川さんはマジKYだったけどね。

委員長の必死のフオローも水の泡。姫川さん超ウザイ。あーあ、帰りたいよお。

四月 日 (はれ/くもり)

なんてこつたい。どうやら副会長はM属性を持つ人だったらしい。どこから仕入れた噂かは不明だけど、副会長が姫川さんを気に入ったのは愛想笑いを『気持ち悪い』と言われた事が原因らしい。

理事長室まで案内してくれている副会長の笑顔を見て、『その社交辞令の笑顔……とても気持ち悪いので止めてください』と言ったそうだ。

何それ超失礼。社交辞令とか当たり前だし。どう考えても恋の花咲くポイントじゃないよね。

しかし何故か副会長は満面の笑みで姫川さんを抱きしめたらしい。M属性が確定された瞬間だ。

友人の絵理が『嘘の笑顔だとハッキリ言う人が嬉しかったんじゃない?』と言っていたが違うと思う。

きっとMの副会長は姫川さんの隠されたS属性に気付いたんだ。私にはよくわからん喜びだが、おめでとう副会長。

この噂が出回って、姫川さんが再び女子に囲まれていたけど慌てて走り寄った委員長を横目で見ただけで私は自分の席についた。相変わらず姫川さんは見ているだけでウザイ。

何か副会長をスタートとして生徒会とか絡んできそうな気がするけど、今は考えるのを止めよう。

あ。そう言えばもうすぐゴールデンウィークだ。早く帰りたいな。

四月の日記はここで終了している

(……………訂正。)

す)
(ループに気付いた数日で私の心は既に荒みまくっていたらしいで

日記（五月）

五月の日記は最初の方の日付がなかった。

休日中に体調でも崩していたかな、と思い返していた私の目に飛び込んできたのは休日明けの日付だった。

五月の日記

五月 日（くもり／はれ）

いやあ日記の存在をすっかり忘れてたわ。正確には姫川さんの存在を、だけど。

休日中に親戚のオジサマに財布の中身を潤わせてもらったから、久々に破格値の学食に足を運んでみたけど大後悔。時既に遅しってやつだね。

どうやら今日は姫川さんも食堂で学級委員長と一緒にいたらしい。そしてそこへ滅多に食堂を利用しない生徒会の皆さんがご登場。

目的は副会長が夢中？になったと噂の姫川さんを一目見ることにしたいけど、自分達がアイドル的立場なのを理解していて欲しいものだ。

まあ、そんな私の無言の訴えなんて彼等に届くはずもなく、副会長は素晴らしい笑顔で食事中の姫川さんのもとへ走り寄ったんですよ。『愛華！』なんて名前呼びで。

しかも姫川さんも『玲先輩！』なんて自分から抱き付くもんだから……はい、ものすごいブーイングの嵐でございました。誰か耳栓ください。

更に副会長が姫川さんの頬にキッスするもんだから困った困った。

とりあえずココは日本だから挨拶はコンニチハで済ましておけよ。

で、更に更に面倒なことに存在を無視されていた他の生徒会メンバーが姫川さんに自己紹介を始めたんですね。双子の書記と庶務にチャラ系の会計。そして最後に学園の生徒トップの会長さま。

何を思ったのか、会長さまったら姫川さんの顎を掴んで無理やり上を向かせた後『気に入った、俺様の女になれ』だって。おま、リアルで自分のこと『俺様』なんて言う人初めてみたわ。危うく味噌汁噴き出すところだったよ。

もうそこから煩いの何のって。

まず最初に、怒った姫川さんが会長さまにビンタして一瞬食堂内が静まり返ったんだけど、『ますます気に入った』と会長がM発言。

次に『愛華ちゃんって面白いからお友達になりたいな!』と言う双子に『私達はもうお友達でしょう?』と姫川さん。どうやら姫川さんと言葉を交わせば強制的に友達のようだ。気を付けよう。

その次には『オレ達生徒会は多くの生徒に公平でなくちゃならないから友達が少ないんだよ』という会計に姫川さんが『そんなのおかしいわ!ファンなんて、必要ないじゃない!』とKYスキル発動。たぶん、友達になることに隔たりなんて不要!的な事が言いたいのだと思うけど今の発言は明らかに『ファンが邪魔』『ファンが悪い』という意味に取れてしまう。

実際、生徒会のファンだと公言していた生徒達からは怒声と鋭い視線が姫川さんに送られていた。

そして最後には『なんて心の優しい子なんだ』と声を震わせて感動している生徒会の皆さん。ぶっちゃけ私はドン引きでした。

ちょうど『シェフのお勧めAランチ』を食べ終えた私には食堂はもはやカオス。

なので爆笑してヒューヒュー言っていた絵理を連れて食堂を後にした。

絵理は明日腹筋が筋肉痛だと思う。

あ、そう言えば。あの力オスの中で学級委員長が顔を真っ青にしてたような気がする。ご愁傷様でした委員長。

財布も寂しい状態に戻ったことだし、明日からまたお弁当持参に戻ろつと。帰れることが一番だけどね。

五月×日（くもり）

昨日は食堂が鬼門だと思ったので通常通り教室で絵理と仲良く持参したお弁当を食べていた。

あの大騒ぎは最終的に風紀委員会が出動して何とか場をおさめて解散したらしい。

『一般生徒にあまり関わるな』と言った風紀委員長に姫川さんが物申したという場面もあったようだが、それ以上の情報は入ってこなかった。何故なら話を聞いている途中に再び騒ぎが起こったからだ。

あーら不思議。昼休み開始時には消えていた姫川さんと学級委員長が教室にあるではありませんか。

そして何故かその後ろには昨日食堂で見たメンバーが勢揃い。廊下側からの一般生徒の視線も熱い。何か一気に人口密度が上がって教室内の酸素が薄くなった気がした。誰か光合成しろ。

姫川さん達のやりとりに耳を傾けたところ、生徒会メンバーが姫川さんを誘いに来たらしい。

確かに姫川さんは美人だけど、こんな一度に男性陣を虜にしてしまうほど魅力的なひとなのだろうか。という疑問が私の中で浮かん

だ。

女子と男子では互いに『可愛い』と映る人物が全く異なると言うが、こういう場合を示すのだろうか？

『もうっ！私は親友の詩織と一緒に食べるって言ってるでしょ！？』……とか物思いの途中に耳に入っただけど、ないわー。姫川さんマジないわー。こりゃ男でも可愛いとは思わないっしょ？

いつのまにか親友に昇格してる学級委員長のこと、本当はどうでも良いって思ってたそうだね。だって今の発言で生徒会メンバーが委員長のこと睨みまくってるし。

結局、委員長も一緒に行くことで上手く(?)まとまって姫川さん達は食堂に向かった。

生徒会と風紀委員会しか使用できない特別席に座ったことが再び問題として噂されるのだけど、私には関係のない話だ。

とりあえず親友に昇格した委員長にならって、姫川さんをKYからSUKKYに昇格させておこう。SUKKYとはスーパールトラ空気読めないの略である。なんちゃって。

五月 日 (あめ)

すっかり忘れていたけど、もうすぐ中間テストだ。

一度勉強したことがあるからと言って油断したら大変なことになると思ったので、図書室に勉強しに来てみました。けど三秒で後悔。

何の悪縁なのか、最近すっかり見慣れた『姫川さんと愉快的仲間

達』が図書室で騒いでいるじゃありませんか。
マジありえねー。勉強できるはずねえー。という事で何もせず図書室を去りました。

あれ。今思い返せば会計の姿がなかった気がするけど……気のせいかな。

たぶん他の場所で可愛い女の子とイイコトしてると思うけど。

そういえば風の噂で風紀委員会も徐々に姫川さんと接触を持ち始めたらしいね。

気になると言えば気になる話題だけど、とりあえず今日は勉強するかなー。

五月 日 (あめ／くもり)

テストとかで忙しくて日記を書いていなかったけど、今日はテストの結果発表だった。

上位三十名まで廊下に張り出される妙なシステムに私の名前は一度も載ったことはない。

ちなみに姫川さんは転校して来てあまり授業を受けていないのに学年三位だった。例のメンバーが褒め称えていてウザかった。

私はというと、もちろん今回も載っていない。だけど今日はテストの事で最悪な気分になった。

結果から言えば私の順位は三十一位だった。ギリギリ載っていない状態だ。

今までは七十位付近をフヨフヨしていた私の成績。それが三十一

位ということとは、わりと良い上がり具合らしい。

正確に言えばループする一年間の最初のテストで加減がわからず、思いのほか良い成績だったという結果にすぎない。けれど、それは教師陣からは前向きに捉えてはもらえなかったようだ。

私の名字は平田。八行の二番目の『ヒ』。そして学年三位という輝かしい成績の姫川さんも八行の二番目の『ヒ』。名前の順に席につくと私は姫川さんの真後ろの席になる。

早い話が、姫川さんの答案をカンニングしたのではないかという疑いをかけられた。

長机とパイプ椅子しか存在しない生徒指導室に呼び出された私の前には担任の六井先生と風紀委員会顧問の十倉先生。

机の上には返却された私の答案用紙と、恐らく本人には内緒でコピーした姫川さんの答案用紙が散らばっていた。

一度、過去に受けたテストをループする事で再び受けているのだからズルをしていないとは言えない。でもこれは酷いと思う。間違っていると思う。

学年三位になる姫川さんの数個の間違い個所と、決して少なくはない私の間違い個所が重なる偶然なんて当たり前と言っても過言ではない。

それなのに、この二人は最初から私がカンニングをしたと決めつけている。否応無しに反省文を書けと言っているのが何よりの証拠だ。

もちろん私は否定した。けれど『こんな奴の近くに座った愛華が可哀想だ』とか『今後のテストで対策を考える必要があるな』と零した二人に対して怒りで目の前が真っ赤に染まった。

六井先生は軽い所があるけど意外に生徒思いな面のある良い先生

だと思っていた。十倉先生は言葉は厳しいけどその人の事を考えていることが分かる良い先生だと思っていた。

それが、たった一人の女のせいでこのザマだ。姫川さんの輝いている部分しか見ておらず、本質的な部分を全く見抜けていないくせに全てを理解して守つてると思い上がっている最低な男が二人。

ぼやけた視界の先に存在する二人の教師を、慕っていた自分が馬鹿らしくなった。声にしても伝わらないことを、これ以上どうすれば良いというのか。

悔しくて悔しくて、たまらなくなつて、私は自分の答案用紙と反省文用の原稿用紙を引つ掴んで生徒指導室を飛び出した。私を追うようにして聞こえてきた声は届いていないフリをして。

この日、私は自分が終わらない一年を繰り返していることを心の底から嫌になつて廊下を全力で駆けながら声もなく泣いた。

はやく、かえりたい。

五月の日記はここで終了している。

(私が流した涙の意味は私しか気付けないし、知ることはない)

（私が泣いた裏で笑っているのは一体ダレ……

？）

日記（五月）（後書き）

逆ハ―女は、まんま王道ですW

日記（六月）

五月の日記が綴られた次のページを見た私は、思わず頬を引き攣らせた。

なぜなら、そこには六井先生と十倉先生の悪口がページの余白部分まで余す所なく極小の文字でビッシリと埋まっていたからだ。

……自分で言うのも何だけど、どうやら私はけっこう根に持つタイプらしい。

とりあえずカニング疑惑をかけられた五月の続き、六月の日記を読んでみよう。

六月の日記

六月 日（どしゃぶりの雨）

六月の六という字は嫌いだ。何故なら口に出すのも腹立たしいホスト教師の名字の一部だから。

とりあえずあの先生と十の字がつく先生は湿気でジメジメしている廊下で転べばいいと思う。むしろ転べ。三回転ぐらいしてしまえ。

あのアホ教師二人に書くよう指示された反省文だけど『私は無実だ』という言葉を原稿用紙二十枚にビッシリと書いて提出しておいた。しかも二人分。つまり四十枚だ。

最初は書き直せと突っ掛かってきた二人だが、私が冷めた眼で三度ほど同じことを繰り返すと何も言っておこなくなった。ついでに言うとは二人に挨拶すらしなくなった。目線も合わせない。存在ごと丸々と無視だ。

雨ばかり降っているので忘れがちだが、実は今月は体育祭がある。というか私は忘れていた。思い出したのは参加競技を決めるLHRがあつたからだ。

うちの学園は少し変わっていて体育祭は二日にわたって行われる。一日目は学園に慣れ始めた一年と他の学年が交流を深めるために何か催しを行う『交流会』。そして二日目が世間一般でいうところの体育祭だ。

確か交流会の内容が『校内鬼ごっこ』だったはず。一年全員が逃げる側で他が鬼役だそうだ。昼休みに絵理が教えてくれた。逃げ切った人や一定の数を捕まえた人には賞品が出るようだが面倒なので適当にサボろうと思う。

変わって体育祭の方だけど、私は借り物競走の補欠という事実上競技不参加の地位を勝ち取った。ジャンケンでチヨキばかり出し続けていたら王者に君臨していた。チヨキすげえ。

ちなみに姫川さんは私が補欠になった借り物競走に出場するようだ。何だか嫌な予感がする。と書いた部分が『ウザイ予感がする』と見える私の目は視力が少し落ちたのだろうか？

六月×日（はれ）

嫌な予感もとい、ウザイ予感は見事的中した。

本日校内放送にて『二年二組、姫川愛華を生徒会専用チアガールに任命する』というふざけたお達しがあつた。生徒会とか滅べばいいのに。主に六の字がつく顧問が。

放送後、当然のように教室に現れた例のメンバー＋風紀委員達が姫川さんを取り囲んで教室内が一気に騒がしくなった。

勝手に耳に入ってきて来る話によると、『専用など許可できない』と言う風紀委員長の発言をプラス方向に受け取った姫川さんは生徒会だけでなく風紀委員も応援してさしあげるようだ。お優しいことですな。

チアの件は本人がノリ気のように全く嫌がっていない。それどころか『皆が可愛いと思う子を集めてチアガール隊を作ろうよ！』とまで言い出した。

可愛い子、という単語に反応した生徒会と風紀委員は間を置かぬ早さで姫川さんの名を口にし、姫川さんはそれに対して『もうっ、私一人じゃダメでしょ！』と満更でもない顔で笑っていた。最初からコレが目的だったに違いない。うぜー。

それだけで終わるはずもなく、更にウザイと思ったことも起こった。

『あの子もチアに入れるつもり？』と学級委員長を見ながら言った風紀副委員長に姫川さんは『チアは可愛い子じゃないとダメでしょ？だから詩織には無理だよ』と。

……マジパネエな姫川さん。この間親友に昇格した委員長を真正面から『可愛くない』と宣言したよ。例のメンバー達は『その通りだ』と言って笑っているけど、他は誰も笑っていない。

おかしい。変だ。前から思っていたけど、姫川さんを囲むメンバーは異常だ。

こんな女の何処が魅力的なのか全く理解できない。まるで魔法にでもかけられたような酔狂っぷりに寒気さえ覚える。

ああ、恋ってこんなに怖いことなのだろうか。

六月 日 (はれ/くもり)

今日も今日とて校内放送が流れた。

『二年二組、姫川愛華は転校生のため交流会で逃げる側に位置づける。生徒会以外が捕獲した場合は捕獲者にペナルティを与える』
だつてさ。もうお前ら全員ホテルで悪代官ゴツコでもしてろ。

ついでに聞いた話によると、姫川さんが先日任命されたチアは競技に参加せず常に応援に徹するらしい。つまり補欠の私が必然的に繰り上げ出場ということだ。

もうホント誰か姫川さんを止めてくれませんかね。あーヤダヤダ。

六月 日 (くもり/あめ)

放課後、傘を忘れたので雨が小降りなつてからダツシユで帰ろうと思いつながら校内を徘徊していた私は最悪な場面に遭遇してしまつた。

偶然前を通つた女子トイレの中から怒声やら罵声やらが聞こえてきたのだ。十中八九、イジメ的な場面。

こつそり聞き耳を立てたところ中にいるのは生徒会+風紀委員のフアンの皆さんと姫川さんだと確認できた。水音が聞こえてきたので姫川さんに水を掛けているのだらうと推測。

どうするべきか悩んでいたら、バタバタと足音が聞こえてきたのでその場から離れた。再びこっさり様子を窺うと学級委員長が風紀委員数名を連れてトイレに突入していた。危ない危ない。下手をすれば見張り役をしていたのだと勘違いされていたかもしれない。とりあえず当初の目的通り雨も小降りになったから早く帰ろうと。

後日、姫川さん呼びだした生徒達が謹慎処分を受けたと聞いて、嫌な想いが胸に広がった。

六月 日 (はれ)

今日は交流会だったが、良いサボり場所をみつけることができず終了まで爆睡してやった。見回りの風紀にも見つからない絶好のスポットだった。

姫川さんはどうやら生徒会長が終了間際に捕まえたらしい。生徒会メンバーが姫川さんを捕まえれば何かご褒美がもらえる約束だったそうだ。

ま、どうでもいいか。

六月 日 (はれ)

今日は体育祭だった。補欠から繰り上げ参加になった借り物競走は二位という結果に終わり、まあまあチームに貢献できた方だと思

う。

借り物のお題の中には『好きな人』等のアタリ（私にとってはハズレ）もあったようだが私が引き当てたお題は『水筒』だった。超無難。

同じ競技に出場していた生徒会の双子の片割れ（どちらかは不明）と風紀委員の不良っぽい見た目の人が似たようなアタリのお題を引いて姫川さんを取り合いしていたが、華麗にスルー！。

他にも色々ウザイ競技があっただけど、私には直接関係なかったの
で特に書くことない。今日は疲れたので早めに寝よう。

六月 日（はれ／くもり）

六の字がつく最悪ホスト教師の授業で小テストがあつた。期末テストが近いからだろう。

テスト中は私のことを監視しているようなので完璧に問題を解き、テスト用紙を裏向けて終了の合図があるまで二度と用紙に触れなかった。

逆に余りまくった残り時間中ホスト教師をガン見してやった。暫く目線を合わせていなかったたのでホスト教師は少し戸惑っていた。ざまーみる。

六月の日記はここで終了している。

(名前すら記述されない二人の教師も、美を詰め込んだようなお姫様に未だ夢中)

(彼等を含め、魅了された者は気付かない。周りが自分達をどんな目で見始めているのか)

日記（七月）

私は自分に害が無ければ情報を記入しないどころか日記すら書かない自分に苦笑した。

一カ月は約三十日あるのに毎月の日記は数日分だ。それだけ平和な日々を送れるのだと安心すべきか情報が少ないと危機感を募らせるべきか。

……だけど、この日記を書いている時の自分は前者でも今の私は後者だった。

七月の日記

七月 日（はれ）

明日からテストが始まる。

前回のテストでは非常に嫌な思いをしたので今回のテストでは通常通りの順位に戻そうと思う。

やはりカンニングしていたのではないかとされる気もするけど、ヤケになって良い成績を取るのも変に目立つことへ繋がるので回避する道を選んだ。

それに、私が知らない未来を自分で作り出すのはある意味博打に近い。知っている未来に近ければ近いほど私は安全に過ごせるのだから、わざわざ危ない橋を渡る必要なんてないのだ。

というわけで、最後の復讐を兼ねて図書室にやって来たわけですが即退室しちゃいました。

理由はもちろん、無駄に騒がしい図書室と美形ばかりのメンバーです。お前ら皆頭良いんだから図書室来るなよ。家に帰って寝てろ。

なんて私が思っても意志が通じるはずもなく、私の方が家に帰って寝ることにした。何か一気に疲れたからもう勉強とかいいや。

あ。そういえば帰る時に校門のところまで会計を発見した。今日は珍しくあのメンバーの中に居なかったようだ。気付かなかったけど。

七月×日（はれ）

期末テストが終わって数日が経過した。返却された答案に記された点数はほぼ予定通り。この様子なら元の七十位付近に戻れるだろう。

と思つて余裕をかましていたら、中間テストに続き今回も生徒指導室に呼び出された。室内にはホスト教師と風紀のインテリ眼鏡教師。そして机の上には私の答案用紙。何このデジャヴ。

刑事ドラマの再放送を早く帰って見たい私がチラリと視線を送ってみると、それを合図に目の前の教師二人がいきなり『何だこのテストは』と言つてきました。意味わからん誰か説明してくれ。

ウザイなー、と思いつながら話を聞いてみると二人は私の点の取り方が気に入らなかつたようだ。

まあ、何となく言いたい事は分かつた。何故なら私は中間テストでの疑いを晴らすために『正しい解答』しかテストに記入していないからだ。

だからと言つて私が満点を取つたわけではない。つまり、私はある一定の点数が取れる問題にしか解答を記入しなかつたのだ。

残りはずべて未記入のまま。問題に手をつけた形跡すらない。

と×が混在する私の答案用紙をよく見れば、子供でも気付く不自然な点。それが二人の癪に障っているらしい。

『君ならもつと上位が狙えただろう』と眉根を寄せるインテリ眼鏡教師を鼻で笑いたくなくなった。少し成績が上がればカンニングだ何だと疑っていたくせに。

『小テストは全て満点だったはずだろ』と苦い表情をしているホスト教師を殴りたくなった。それはカンニング疑惑を晴らすためにアンタの監視下で私が積み重ねた努力であつて、好成绩をおさめるためのものではない。

自分達が中間テストの時に私に対して何を言ったのか、何をしたのか、忘れたのかと罵声を浴びせて罵りたくなった。

けれど、何事も先に怒った方が負けだと私は知っている。だから私は言つてやった。自分が出来る最高のニッコリ笑顔で二人に告げてやった。

『私、姫川さんの答案をカンニングしたんです』、と。

七月 日 (はれ/くもり)

テストの結果も発表され、あとは夏休みを待つだけになった。

姫川さんは前回と同じ学年三位で、私は予想通り七十位という理想的な順位。

未だに六と十のつく教師二人が妙な視線を送ってくるが今日も華麗に無視を決め込んでます。

生徒指導室での一件は言葉を失った二人を放置して私が帰宅したので有耶無耶のままだ。意外なことに、二人は私の挑発に乗らなかった。

もちろんカンニングの事は嘘だ。

私が自分の解答用紙に答えを記入し終え、用紙を裏返してから終了の合図があるまで指一本触れていないことは試験監督を担当した他の教師が証人になる。

それは特に私を注意深く監視していたあの二人にも言えることで、私が姫川さんに視線を向けなかった事を誰よりも断言できるはず。

上手くいけば、個人的な感情を介入させまくっている二人の教師とウザイ姫川さんに矛先が向くと思ったのだけど……そう簡単にはいかないらしい。

まあ、私は自分のカンニング疑惑さえ晴れれば満足だから別にいや。テストの件はこれで終わりにしよう。先生達のこととは無視し続けるけどねー。

七月 日 (はれ)

今日は一学期最終日。

清々しい気持ちで締め括りたい、と思っていたのだけど希望は叶わなかったようだ。

夏場はゴミの腐敗が早いので勘弁してほしい。どうやら生徒会＋風紀委員のファンのイジメが夏休み開始直前に復活したらしい。

原因は恐らく先日のアレだ。

日記をサボっていたから書き忘れたのだけど、数日前に例のメンバーが教室にやって来て姫川さんの夏休みの予定を聞いていた件だ。各自が所有する別荘に誘って来る中、『私一人だけなんて、無理だよ』と頬を染めながら言う姫川さんは果てしなくウザかった。最終的に生徒会長の別荘に全員で遊びに行く事になったらしいが、それが再びイジメの火種を大きくしたようだ。そしてそれは、巻き込まれた学級委員長にも飛び火する形になると思う。

実際、下駄箱や机に生ゴミを入れられたのは姫川さんではなく学級委員長だった。

朝早く登校する委員長は姫川さんが登校する前に全部片付けてしまうので、姫川さんは気付いていないようだったけど。

アレだ。本人へのイジメが無理なら周りに害を与えていく巻き込まれ型のパターンだ。これ、二学期には確実におおごとになるよね。相変わらずの美貌で幸せそうに笑う姫川さんの傍らで、苦笑しか零さない委員長をみて私の方が溜息を吐きたくなった。

七月 日 (はれ)

今日から楽しい夏休み。何が楽しいかって、あの濃いメンバーに会う事がないからだ。

文明の利器であるクーラーがよく働く涼しい部屋でダラダラする予定だった私が、絵理の片恋相手(=未来の彼氏)の練習試合を見に行きたいという申し出に簡単に頷いてしまっくらいには機嫌が良かった。

しかし、いざ試合会場に行ってみて大後悔。

絵理は未来の彼氏の元へ差し入れに行き、炎天下のなか私は一人熱気の立ち上がる観戦席でボツチ状態。

ルールもよく分からなので敵味方関係なくノリで拍手するしかなかった。いつまでたっても帰って来ない絵理に一言だけメールを入れて、その日私は寂しく一人で家に帰った。

もう二度とスポーツ観戦になんて行くもんか。やっぱりクーラー最高。

七月 日 (はれ)

コンビニでガリガリちゃんを買った。うまかった。

七月 日 (くもり)

部屋のクーラーが壊れたので絵理の家にお泊り。お土産にガリガリちゃんを10本持参した。うまかった。

七月 日 (はれ)

絵理とプールに行った。売店で買ったカキ氷はイマイチだった。

お泊りは本日で終了なので渋谷家に帰るとクーラーが直っていた。どうやらリモコンの電池切れだったらしい。業者の方、わざわざ申

し訳ない。

しょんぼりしながら冷凍庫を搜索するとガリガリちゃんが出てきた。うまかった。

その日の夜、お腹をこわした。暫くガリガリちゃんは控えようと
思います。まる。

七月の日記はここで終了している。

）思わず日記帳を床に叩きつけてしまったのは仕方が無い、よね？）

日記（七月）（後書き）

友人の彼氏は野球部の設定です

日記（八月）

思わず床に叩きつけてしまったノートを拾って、私は腰かけていた椅子に座りなおした。

今のところ有益な情報を手に入れるに至っていないけれど、今の私が姫川さんを重要人物だと認識しているのだから日記から何かヒントを得られるに違いない。

一学期は自分に起こる変化で精一杯だっただけ。きつと夏休みを機に、重要な何かに気付くはず …… だと思いたい。

八月の日記

八月 日（はれ／くもり）

絵理から電話があった。緊急連絡網で都合のつく生徒は明日学園に集まるように、との指示が回っていると。

絵理の名前は浅野だから女子の連絡網のトップ。ホスト教師から直接告げられたから間違った情報ではないだろう。

何でも裏では理事長も絡んでいるとかいないとか。あ、何か嫌な予感しかない。

八月×日（はれ）

私の嫌な予感が高確率で的中していると思う。

指定された時間に講堂へ集まった私達を出迎えたのは、何故かコスプレ?をしている生徒会と風紀委員だった。

ザワザワし出す生徒達を講堂の席へ座るよう促す副会長の対応は手慣れたもので、やはり人の上に立つだけはあると少し感心した。

が、そんなのは舞台脇からマイクを持って登場したコスプレ?姿の姫川さんを見て吹き飛んでしまった。

微かにブーイングを起こす女子生徒を会長が一喝し、当然のように会長の隣に並んで姫川さんが集会の主旨を説明し始めた。

何でも、発案者は姫川さんで期末テストの日程と重なってしまった七夕を今からやろうというモノだった。

そこで姫川さんと例のメンバーを見て気付く。全員、織姫と彦星の姿なのだ。オイこら彦星何人いるんだ。

『恋つて本当に素敵なことだと思ふの。みんなは恋してる?』と姫川さんが電波なことを言えば彦星達は『俺様の気持ちをしついで、そんな事を言うなんて……お置きして欲しいのか』とか『僕の心は織姫のモノですよ』とか返している。

そこで相変わらずKYスキルを発動させる姫川さんが『私もみんなの事が好きだよ?』と笑顔で言い、彦星達は苦笑いをした。

おーい、頭大丈夫ですか姫川さんと彦星コスプレの男性陣。私を含む生徒達のドン引き具合を少しは気にして下さいよホント。

たぶん姫川さんにメロメロな男達は姫川さんが自分に寄せられる好意に鈍いと思っっているのだろう。絶対演技だろうけど。あと姫川さんお祈りポーズでのマイク両手持ちは止めて下さい。何か腹立つんで。

この先まったく話が進みそうになかったので、私は隣に座っていた絵理に帰ることを告げて講堂を後にした。

一人で帰るのは目立つが、実は私のような生徒は少なくなかった。制服のスカートが乱れるのも気にせず早足で帰っていく多くの女子生徒達。

わりと優等生の絵理を巻き込まないようにしたつもりだけど、これなら一緒に帰っても良かったかもしれないと思いつながら辺りを見回すと、何故か不思議なことに男子生徒の姿が全く無いことに気付いた。

たまたまタイミングが合わなかっただけかもしれないけれど、
…何だか妙な印象を受けた。

で、ここから先は絵理から聞いた話。

あの後、それぞれが満足するまで舞台上でイチャついた例のメンバーはグダグダの七夕劇を演じたらしい。

織姫と彦星を引き裂こうとする者を排除し、織姫が幸せに笑っていられるような夢の楽園で末長く幸せに暮らしたという物語の結末に、女子生徒の多くはヒソヒソと陰口を叩いていたそうだ。

夜は夜で学園側が用意した巨大な流しそうめん機(?)で姫川さんを中心としたメンバーが非常に楽しまれたそう。

あああ、やっぱり早く帰って良かった。疲れ切った顔の絵理を見てそう思った夏の夜だった。

八月 日 (くもり)

夏休みも残りわずかの本日、絵理から妙な話を聞いた。

生徒会+風紀のメンバーが家の都合で日本から離れている数日間

に、姫川さんは複数の運動部の臨時マネージャーを担っていたのだとか。

姫川さんは親戚である理事長から正式に頼まれたようだが、人手が不足しているようには思えない部活動ばかりだ。

どうしよう。片恋相手のことを心配している絵理と同じくらい、私も得体の知れない大きな不安を感じたなんて誰にも言えない。

八月 日（あめ）

降水確率百パーセント。私の嫌な予感的中率も百パーセント。

おかしなことに、私の周りで夏休み終盤に入って破局するカップルが急増した。私の周りで、というより男側が学園に通う者であるという嫌な共通点があった。

別れる時に、みんな決まって『好きな子ができた。彼女以外を愛せない』と告げるらしい。更に妙なのが、恋人がいない男子生徒も決まって同じことを周りに告げている点だ。

ヤバイ。何かわからないけれど、とにかくヤバイ。

とりあえず今日は片恋相手の恋愛相談を受けた事でボロボロに泣いている絵理を慰めることに専念しよう。

絵理の片恋相手の様子も、噂と違うところなんてなかった。

八月 日（大雨）

夏休み、最終日。

『俺、姫川さんの事が好きみたいなんだ』。
片恋相手から絵理に告げられた最悪な一言が、私をも最悪な世界に突き落としてくれた。

八月の日記はここで終了している。

「これ……、痛っ!？」

八月の日記を読み終わった瞬間、酷い頭痛がして私は自分の頭を両手で必死に押さえた。

そうすることで痛みが治まるわけでもないのに、それ以外の行動なんて出来ないくらいの痛み。

ぎゅっと瞑った目の奥でチカチカとしながら目まぐるしく変わる
『何度もループしている一年間』。

姫川さんを取り囲むキラキラとした世界がある裏に、筆で乱雑に塗りつぶされたような隠れた風景もあった。

知らないけれど、知っている。知っているけれど、何故か知らなかった過去。

過去を覚えていると思っていた私の『記憶』は実は不完全なもの
で、今この瞬間に再び巡った映像が本物なのだと 漠然とした頭
の中で思った。

たった一巡前の記憶すら残った日記を読み返さないと取り戻せないほどに強力な、何かが悪魔をした本当の記憶。

「え？ あれ？ な、何で私、こんな重要なこと、今まで忘れて…」

（もしかして誰かに、何かに、強制的に記憶を奪われていた…？）

（この先の日記を読み返すのが、何故かとても怖くなった）

日記（八月）（後書き）

急展開！（*・・・）

（

。

）

）

）

）

）

）

）

）

）

）

二年目を巡る『私』へ

九月の日記が書かれる前のページに、こんなメッセージが残されていた。

『私』へ

初めに、ループに気付いた二年目でこの日記を目にするであろう『私』に謝罪と忠告を。

読んでの通り一学期分の日記は何の役にも立たないと思う。ごめん、せつかく日記を頼りにしてくれたのに。

でも覚えていることの全てがこの日記を読んでいる『私』に起こる全てでないことを忘れてはいけない。現に私は自分の記憶に存在しない、ある意味最悪の一年を過ごしているのだと考えているのだから。

もしかするとこの日記はループに気付いた二年目を巡る『私』に届かないかもしれないけれど、残さずにはいられない『一年目の私』の過ちと決意を知っておいて欲しい。

無駄に終わるかもしれない一年目だけでも、私なりに姫川愛華について調べてみようと思う。二年目以降の『私』に迷惑がかられないよう、接触を避けての調査はあまり進展がないかもしれないけれど。

そしてそれは二年目以降の『私』も守らなくてはならないルール。確証を得るまで姫川愛華に近づいてはならないという、最大の禁忌^{タブー}。

二年目の『私』やそれ以降の『私』に少しでも望みが繋がりますように。

消えてしまいかもしれない記憶を少しでも多く『私』に残せるように、帰るために頑張ろうね。

(重要な記憶の殆どは消えてしまっていたけれど。)

(この日記を残してくれたことで蘇った記憶があるのだと、『私』に伝えたいと強く願った。)

二年目を巡る『私』へ（後書き）

一年目の『私』から二年目の『私』へ、の文章でした。

『私』は常に同一人物ですが一年目は特に記憶のリセットが強いという感じでした。

日記（九月）

夏休みの一件を経て、一年目の私は一学期より詳しく日記を書いていた。

姫川さんとの接触を極力拒んだ状態での情報収集には時間を要するのか、数日分の行動がまとめて記載されている部分もあった。

九月の日記

九月 日（くもり）

二学期開始日の本日。さっそく姫川さんと生徒会はやってくれた。講堂で行われる始業式の最後に生徒会からの連絡と称して「姫川愛華を生徒会補佐に任命する」と会長が宣言したのだ。

生徒会や風紀は「数持ち」と呼ばれる家柄がないと所属できないのに。彼等いわく、補佐だから「数」は必要ないのだとか。

ザワつく講堂を見回してみたところ、私は二つ疑問点に気付いた。まず一つ目は、生徒会顧問のホスト教師が姫川さんの生徒会入りに、私達と同じように驚いていたことだ。

「俺に相談も無しに、勝手に決めるな」と風邪を引いているホスト教師がマスクでイケてる系の顔の半分を隠した状態で咳き込みながら突っ掛かっていたから、顧問を無視しての決定なのは間違いない。

次に二つ目だが、一学期には生徒会の行動に顔をしかめていた男子生徒達が「姫川さんなら」と納得の表情を浮かべていること。

いよいよ本格的に学園の歪んだ部分が見えてきた気がした。
とりあえずコソコソ頑張ってみるから、姫川さんとの接触だけは
勘弁して下さい。

九月×日（くもり／はれ）

朝からホスト教師にバツタリ会ったので挨拶したら超驚かれた。
なぜ。

今日も昨日に引き続きマスクをしているという事は風邪が完治し
ていないようだ。感染したくないので近寄らないでほしい。

でも姫川さんの取り巻き化している人物に個人単位で接触できる
機会は滅多にないので少し観察させてもらうことにした。

どうやら朝っぱらから何処かに書類を届けるようで、ホスト教師
の手には二十枚近くの用紙があった。これが重い荷物なら運ぶ手伝
いを申し出ただけけれど、紙切れじゃあ仕方がない。

『こんなに早くからお仕事ですか？』と会話のキャッチボールを
試みるとまたもや驚かれた。だからなぜ。

私の問い掛けにホスト教師はぎこちなく『生徒会の仕事だ』と答
えた。ああ。だから朝早くから一生懸命仕事をしているのか、と冷
めた気持ちになった。

それが後押ししてしまったようで『朝から姫川さんに会えるなん
て良かったですね』なんて嫌味を込めて言ってみると『馬鹿言うな
姫川は綺麗なだけの女で何の魅力もないだろ』と真顔で返された。

あれ？ 先生って姫川さんのこと名前で呼んでなかったっけ？

それに姫川さんのことを気に入って、尻を追いかけまわしてたん
じゃ？

『じゃあな』と短く別れを告げられて去っていくホスト教師の後ろ姿は、一学期のモノとは違っていているように思えた。

九月 日 (くもり)

二学期が始まって数日経過した。すっかり忘れていた実力テストに多少焦ったが、一学期の期末と同じ方法で解答欄を埋めたので特に問題は起きないはず。

それよりも、ホスト教師だ。

テスト終了と共に風邪も完治したようなので、問題の質問を装ってもう少し姫川さんの情報を聞き出そうとしたら態度が百八十度変わった。

『愛華なら可愛くお願いをする』『お前も愛華を見習って少しは可愛くなれ』『ま、愛華ほどの女は世界中どこを探しても存在しないがな』とかグダグダと言いやがったので質問していた問題は『急に閃いたので結構です』と告げて数学準備室を後にした。爆発しろホスト教師。

先日は姫川さんのことを否定していたのに、今日のホスト教師は姫川さんのこと名前で呼んで惚気話も絶好調。早く姫川さんの居る生徒会室へ向かいたいと愚痴を零しつつソワソワしていた。

どうやらホスト教師が正気？に戻ったのは風邪を引いている間だけだったようだ。

うーん。これって結構重要な手掛かりじゃないかな。引き続き調査を続行しようと思う。

九月 日（はれ）

テスト結果発表と同時に学級委員長へのイジメが再開された。

姫川さん本人をイジメない理由は生徒会や風紀の他に、姫川さんに好意を寄せる男子の目が常に光っている状態だからだ。

今はまだ下駄箱に生ゴミ投入と教科書がビリビリに破かれていること以外は起きていないようだけど、その内エスカレートしていくと思う。

今日の昼休み、生徒会室で例のメンバーを集めて昼食を取るといふ姫川さんに半ば強制的に学級委員長が連行されていたので拍車がかかる事は間違いない。KY炸裂の姫川さんが委員長にベツタリな限り。

そういえば最近、生徒会や風紀が仕事をしていないと噂が流れている。だから委員長のイジメも放置されているのか。

九月や十月は目立った行事が無いので今のところ大きな混乱は生じていないけれど、十一月には『創立祭』と呼ばれる世間一般では文化祭に該当する盛大な行事がある。

例年通りなら、そろそろ文化委員が集まって詳細を詰めているはずなのだが……。果たしてそこに生徒会や風紀の姿はあるのだろうか？

その辺りのことも調べてみようと思う。慎重に、ね。

九月 日（くもり／あめ）

火の無いところに煙は立たない、という言葉は本当だった。

噂の通り、生徒会と風紀は姫川さんを困って日々お茶会だ何だと遊び呆けて執務放棄をしていた。

『創立祭』の準備は各委員会の委員長または代理である女子生徒達が行っているらしい。男子？そんな性別ありましたっけ？

学園をまとめるのは生徒会と風紀の二大勢力だが、体育・文化・図書・美化・保健といった各委員会の委員長もそれなりの権限を所
有している。特に今回の『創立祭』で生徒会と一緒に中心になる文化委員会の長である先輩は学園女子生徒の代表と言っても過言ではない人だ。

もし、その先輩が各委員会と姫川さんを除く学園中の女子生徒と結託して対抗したとすれば……？

なんて、最悪のシナリオを考えた私は徐々に迫りつつある『創立祭』が少しだけ怖くなってしまった。

九月 日 (くもり)

やはりイジメの内容はエスカレートしている。

学級委員長がモップを洗った後の汚れた水を頭から浴びせられたようだ。

実際にその現場を見たわけではないので断言はできないが、とりあえず第三者の仕業なのだけは確実。

しかし、そんな委員長を見てイケメン達と教室でイチャついてい

た姫川さんは『ヤダ、詩織ったら転んだの?』とトンチンカンな発言をなさった。

委員長の席は姫川さんの隣なので、体操服やタオルと取るために必然的に近づかなくてはならなくなる。それが姫川さんが中心になっっているイケメン達には考えつかなかったらしい。

『愛華が汚れる』と言って委員長を遠ざけようとする面々に、姫川さんは『親友の詩織に酷いことを言わないで』と美しい顔を悲しげに歪ませた。だがすぐに『みんな心配してくれてありがとう!』と言って満面の笑みをイケメン達に向けたのだ。

呆れを通り越して、悪寒がした。

本当に親友なら委員長がずぶ濡れで現れた瞬間に駆け寄るはずだ。周りの男共なんか蹴散らして、何があつたのかと理由を聞くはずだ。

姫川さんにとって委員長は親友なんかじゃない。自分をより良く魅せるために『踏み台』だ。

だから姫川さんは、自分の荷物を掻き抱いて教室から逃げ去った委員長を追いかけもしなかったんだ。

『今日のお茶はダーズリンがいいな』と副会長の腕に手を絡ませた姫川さんが、私の目には心を持った人間に映らなかった。

九月 日 日 (あめが降り続いた)

この三日間、学級委員長は学校に来ていない。

一応担任であるホスト教師によると風邪で寝込んでいるらしい。

自称親友の姫川さんは、イケメンと遊ぶのが楽しいようで委員長が休んでいることに気付いていなかった。

九月 日 (はれ)

委員長が登校してきた。

が、何故か姫川さんは『休むなら連絡してくれなきゃ!』と怒っていた。周りのイケメン達も『愛華に心配かけたから謝れ』と意味の分からない事を言っている。

それに対して何か言いたげな委員長だったが、諦めたような表情で姫川さんに小さく謝っていた。

もうあの連中はダメだと思う。

イケメン達に憧れの視線を送っていた女子の殆どが、冷めた眼で自分達を見ていることに全く気付きもしないのだから。

あ。そういえば、九月に入ってから生徒会と風紀は一度も仕事をしなかったようだよ。

九月の日記はここで終了している。

(一年目の『私』は創立祭が怖いと綴っているけれど)

(私はこれ以降の日記を捲るより、これから先の二年目みいの方が怖く
なってきたよ。)

日記（十月）

先の日記にもあったように、九月と十月は創立祭に向けての準備等で特に目立った行事はない。

しかし今の私にはそれが嵐の前の静けさのように感じられて、ざわざわと沸き上がってくる嫌な予感を必死で否定し続けた。

十月の日記

十月 日（はれ）

創立祭が近いのでクラスで何をするか話し合うことになった。

姫川さんは生徒会の方で忙しいという理由から不参加らしく、同じく生徒会に関わりのあるホスト教師の隣に座ってファッション雑誌と一緒にみながらイチヤイチャしていた。ウゼエ。

男子は嫉妬心丸出しの目で二人を見ていたが、もはや彼らに無關心になりつつある女子は総じて無視。ある意味KYの二人のおかげで催し物が『休憩所』に即決した。やる気が無さすぎるぜ二年二組の女子達。

職務放棄真っ最中の生徒会と風紀だが、彼等は合同で劇をするよ
うだった。

仕事はしなくせに創立祭への申請だけは行っていることに、溜息しか出てこない。

私の予想ではそろそろ各委員会の委員長が動き始めるんじゃないかと思っている。諜報活動もより慎重に行う必要があるそうだ。

十月×日（はれ／くもり）

ついに学級委員長の堪忍袋の緒が切れた。

という表現は大袈裟すぎるので、委員長が姫川さんに反抗したと記しておこう。

しかし場所とタイミングが悪かった。

食堂二階にある生徒会専用席に連行される途中での抵抗は、委員長が自分の首を締める結果に終わってしまった。

二階へあがる階段の前でのそれは姫川さんを輝かせるだけの舞台にしかない。

たった二、三段だ。たったそれだけの高さでも姫川さんが『階段から落ちた』という事実を作り出すには十分すぎる材料だった。

委員長が勢いよく姫川さんの手を振り払ったところで、姫川さんが悲鳴をあげながら階段から大袈裟に倒れた。

そう、倒れただけだ。どこからどう見ても『落ちた』のではない。ただ姫川さんの事が大好きな人達の目にはそう映らなかった。

姫川さんを助け起こす面々の視線は委員長に集まり、まるでゴミを見ているかのような印象を抱かせた。

罵倒する男子生徒や呆れる女子生徒の気持ちも混在する中、結局は暴行の現行犯ということで風紀に謹慎処罰を受けた委員長。

しかし彼等いわく天使のように優しい心を持つ姫川さんの申し出で、三日以内に反省文を提出するという罰に軽減された。

委員長のことはとても気の毒だと思っ。

でも、私はそれを庇えない上に明日の我が身だと思っ
て警戒心を強めるに留まる他がない。

ごめん、委員長。ループを抜け出した先の委員長も笑っ
ていられるのだと信じて、頑張ってみるから　今はまだ、我慢して下さい。

十月　日　（くもり／あめ）

毎度のことだけど今回もすっかりテストの事を忘れていた。

復習でもするか、と図書室へ向かおうと思っただが毎回姫川さん達
が騒いでいることを思い出したので今日は教室で勉強することに
した。

しかし教室の扉を三センチ開けたところで教室に姫川さん達の姿
があるのに気付कि、私は慌てて回れ右をした。騒がしかったので扉
が開いたことには誰も気付いていないはずだ。

というか、教室が騒がしい時点で私が気付けば良かったのだけ
れど。

何だか微妙に疲れてしまったが、再び遭遇しないことを切に願
いながら私は素直に図書室に行った。

姫川さん達を警戒してか、本来ならばテスト前で勉強している生
徒の姿があっても可笑しくないはずなのに、図書室に居る生徒は少
なかった。

室内の奥に目をやると珍しく会計の姿が確認できた。しかし私が
勉強道具を広げたところには居なくなっていた。姫川さん達のところ
へ向かったのだろうか？

十月 日 (はれ)

テストの結果が発表された。いつも通り姫川さんは学年三位で私は七十位台。

しかし、今回のテスト結果に生徒達の動揺が大きかった。

今まで日記には記載していなかったが、生徒会や風紀のメンバーも当然のように学年上位三十名の中に名を連ねていた。

それがどうしたことだろうか。一年から三年の結果表に誰一人として名前が載っていないのだ。

三年からは主席、次席、三位と独占状態だった生徒会長と副会長、風紀委員長の名が。二年からは十位以内に名前があつたはずの会計と風紀副委員長。一年からも生徒会の双子と風紀の不良くんが。

『あんな女に夢中になつていたら当然よ』と誰かが小さく呟いた声に、私は心の中で同意した。

十月 日 (くもり)

生徒会や風紀のファンだった女子生徒達からの学級委員長への嫌がらせが無くなった。

最初は、姫川さんと一緒にいることで生徒会や風紀との接触を持つてる委員長への嫉妬から始まったイジメだが、二学期が始まってからは姫川さんへ向けられない怒りが八つ当たりに委員長へ向かつ

ていた。

しかし先日テスト結果を機に、女子生徒の怒りはイケメン達への失望と諦めに変わってしまったのだろう。

委員長へのイジメがなくなって一安心だけど、皆の失望が最終的に何を招くのか。先の見えない不安によって目の前が真っ暗になりそうだった。

十月 日 (あめ)

創立祭でのクラスの出しモノ『休憩所』のことをLHRで話し合った。

中心になるのは文化委員のハキハキした女子で、姫川さんとホスト教師、姫川さんに熱視線を送っている男子を無視して机や椅子の設置場所を黒板に書いていく。

途中で姫川さんが周りの男子に『劇を見に来てね!』と言っていたが、女子達は姫川さんの声をシャットアウトしているようだった。

一学期にはときどき片恋相手を見て頬を染めていた絵理だけど、すでにその恋は終わりを迎えたようで他の女子と同く無関心を通していた。

二学期末には結ばれるはずだった親友の恋の終わりを目にして、胸が痛くなった。

今この瞬間にも、私の知らない一年が作りだされているのだと再認識せざるを得ない。

十月 日 (はれ)

十月はイベントが何もなかったと思っていたが、姫川さんの中では違っていたらしい。

『今月最後の日にハロウィン関連のイベントを行うので全校生徒は必ず菓子を持参するように』と授業中にも関わらず生徒会が緊急放送を流しやがった。

詳細は当日発表らしいので、仕方なく近所のスーパーで飴の袋を一つ買って帰った。

ああ、飴代の百五十八円を請求したい。

十月 日 (くもり)

朝っぱらから否応無しに講堂に集められた。

程なくして姿を現した姫川さんと残念なイケメン達。とりあえず奴らの格好にツッコミを入れさせてくれ。

昨日の校内放送でハロウィンという単語を聞いた時点で何となく予測はできていたが、いざ目にしてみると痛さ百倍だった。

まず生徒会と風紀、そして各顧問。各自が思い思いの『王子様』のような格好をしていて、見ているコッチが恥ずかしくなった。もうアイツ等はダメだ。

そして今回もマイク片手に自分が発案者だとご機嫌で語りだす姫川さんの格好は、童話のお姫様達もビックリするほど煌びやかなドレスをまとった『お姫様』だった。

周りのイケメン達が金持ちなだけに、そのドレスと装飾品の総額は庶民には目にするとも叶わないだろう。

美しいドレスに美しい宝石。そしてそれを身にまとう姫川さんも美しい人なのに、私には何故か姫川さんが輝かしく見えなかった。むしろドレスと宝石が濁ってさえ見えた。

蔑んだ女子の視線をお得意のKYで受け流している姫川さんによると、今日は『好きな人に思う存分お菓子をねだっちゃおう!』の日らしい。こじ付けも良いトコロだ。ハロウィンに謝れ。

しかし、馬鹿馬鹿しいとばかりに深く長い溜息を吐く女子とは逆に、姫川さんの信者と化した男子達はヒートアップした様子。

『愛華ちゃんかわいいー!』『俺の愛を受け取ってくれー!』『愛華ちゃんの愛をくれー!』とかキモイことを叫びながら席を立てステージ下を集まる男子達に、『もう、慌てないで?私の愛はあ、みーんなのモノだよ!』とウインクしながら手を振っている姫川さん。

とりあえず前方に集まった男子の集団に向かって、持ってきた飴玉を全力で投げたのは当然の行動だと思う。私の他にも同じようなことをしている女子がたくさんいたし。

ハロウィンの仮装(と書いてコスプレと読む)でこのテンションなのだから、創立祭の劇はどれだけ恐ろしい事になるのかと、今から頭が痛くなってきた。

そんな中、『ホント、地に落ちたものね』と冷たい声色で吐き捨

てたのは同じクラスの文化委員の子。

別のクラスで同じく文化委員に所属しているであろう生徒と一緒に姫川さん達を見る目は、何か底知れない光を宿していた。

創立祭をキツカケに、学園が大きく動き出すかもしれない。

周りの女子生徒に一声かけるだけで多くの女子生徒を引き連れて講堂を去っていく文化委員達の後ろ姿を見て、私は自分の無力さが情けなくなつて泣き出したくなつた……。

十月の日記はここで終了している。

(楽しく暮らすだけのお姫様に、一体なにが起こるのだろうか)

(不穏な空気に気付かないはずがないのに、お姫様は何故逃げ出そうとはしないのかな……?)

日記（十月）（後書き）

文化委員は女性だけの集団です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6758x/>

ジュディハピ！

2011年10月21日00時36分発行